スマート農業イノベーション推進会議 第1回畑作プラットフォーム 会議要旨

開催日時 及び場所	日時：令和7年10月21日（火）13:00 ～ 15:00 場所：農林水産省会議室
出席者 (敬称略)	入嵩西敦（石垣島製糖株式会社）、岡田昌宏（岡田農場・株式会社更別プリディクション）、高橋大希（株式会社クローバー・ファーム）、 奈良迫洋介（株式会社くしまアオイファーム）、尾藤光一（株式会社尾藤農産）、三浦尚史（株式会社三浦農場）、山内瑶子（JA鹿児島県経済連）
スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見	**1　スマート農業技術に関する取組・課題** **（全般）** • **農業現場が使いやすく、所得向上につながる技術開発・普及**が重要。 • **GNSSガイダンスが導入されたトラクターや運搬車**などのスマート農業技術は**作業効率の向上に貢献**している。 • 畑作であっても**品目によっては整地作業より収穫作業に労力がかかっている**ため、**効率化する作業を特定し、どのようなスマート農業技術に投資するのかを検討**することが重要。 • **カメラ・センサー・AI等を活用した安全対策**については、自動車の自動運転技術など**異分野の技術を取り入れることが近道**ではないか。 • スマート農業技術は、機能性向上を追求し過ぎた結果、**オーバースペックになる傾向**。コストを抑えて、農業者が導入しやすくするため、**開発メーカーに農業者のニーズを届ける**ことが重要。 **（データ活用）** • 昨今の異常気象への対応においても、**データ駆動型農業を低コストで実践できるようにする**ことが重要。農家が技術導入を判断するため、**導入コストに対してどれだけリターンがあるか計算できる**ことが必要。 • AIを活用した土壌診断アプリでを用いて、**農業にあまり知見がなくても効率的な施肥が可能**。 • 基腐病リスク判定システムを導入しているが、**画像アップロード等の労力削減と判定精度向上が課題**。

スマート農業イノベーション推進会議 第1回畑作プラットフォーム 会議要旨

スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見	**2 スマート農業技術の活用に向けた生産方式や環境整備等に関する取組・課題** **（共通）** • 100枚以上の小規模の畑地を管理しているが、**離農者が多いため、スマート農業技術を活用せざるを得ない**状況。スマート農業技術の効果を十分に発揮するため、**地域に応じて工夫**が必要。 • スマート農業技術の活用にあたっては、**農地集約・基盤整備、通信環境整備、オペレーターの人材育成が課題。** **（ロボットトラクター遠隔監視に向けた課題）** • ロボットトラクターの遠隔監視は魅力的。一方、圃場の規模・条件が異なるため、**北海道の一部の平地での活用に限られ、それ以外の地域への適用にはまだ多くの課題がある**と感じる。 • 本州では周辺が住宅地の圃場、北海道でも観光地付近での圃場がある。**完全無人化を進めるためには、安全対策が必須**。例えば、センサー等で圃場への人の侵入を検知してロボットトラクターが緊急停止する仕組みも考えられる。技術的に可能でも、普及に当たっては、**定期メンテナンスも含めた費用対効果等のコスト面が課題。** • 国際通信規格「ISOBUS」により、トラクターと作業機を連動させ、作業機側でトラクターを制御することができる。**ISOBUSの普及**が重要。 **（情報通信環境）** • 通信遅延により、**位置情報が数センチでもズレると農作業への悪影響が大きい**。例えば、ロボットトラクターによる播種後の作業でマルチを破損することがある。 • 特に離島では、空港付近でも農作業が行われているため、**電波干渉など通信の不具合が生じない環境整備**が重要。 • 圃場が大きすぎると電波が届かないことがある。スマート農業技術を有効活用するため、**整備する通信方式についても十分に検討する**ことが必要。 • 起伏のある場所では特に位置情報の精度向上が重要。**RTKの設置に加えて、高精度の衛星データを活用した取組に期待。** **3 その他** • **スマート農業技術の活用と同時に出口戦略を考えることが必要**。実需者等の関係者も巻き込み、農業者が再生産できる価格形成の議論も必要。